

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

蒼き魔女
リヴィア
迷わされぬ浮城

小説 高岡智空

挿絵 かん奈

| | | |
|-----|---------|-----|
| 第一章 | 蒼髪魔法士 | 006 |
| 第二章 | 淫艶なる魔女 | 048 |
| 第三章 | 魔女の狂宴 | 098 |
| 第四章 | 恥辱の公開調教 | 143 |
| 第五章 | 魔女墮淫 | 200 |
| 終章 | 亡国の魔女 | 247 |

登場人物紹介

Characters



リヴィア・リトルーゼ

史上最年少で女王直属の親衛魔法士に選ばれた魔法王国きっての天才少女。勝気で強気な性格。絶対的な自信を持つ。

イリーシャ

禁呪を用いたことで王国を追放された魔法使い。王国にたびたび戦いを仕掛け、被害を与えている。

ディシディア・ノア・ルミエール

主人公を召抱える王国の主。主人公に密命を下し、イリーシャの討伐に向かわせる。

「えと、ここは……そっか、あたし……」

少しずつ、気を失う前の記憶が甦る。中でも鮮明に思いだせるのが、自分の力を吸収し尽くした魔法符の脈動だ。

(あれは……どうして……。いいえ、そんなことより!)

ここが正確にはどこで、自分はどうなっているのか。現状把握が最優先事項だ。そう思っ
つて腕を動かそうとすると――。

――ジャラリ……

「っ、これは……」

手首と首にリングがはめられ、そこから伸びた鎖が壁に固定されてしまっている。それ
だけでなく肘と膝、足首と腰にも金属の枷があり、それらはそのまま壁に突き刺さってい
た。自由なのは肘から先と首から上のみという状態で、顔の隣あたりに手を上げたバンザ
イの姿勢を取らされている。対魔術式を組み込んだマントも奪われ、そのうえ杖もなけれ
ば、抵抗一つできそうにない。ただ、戦闘の影響で多少の破れこそあるものの、着衣に乱
れはなかった。それだけが救いといえれば救いだつたが、どのみちいまの状況は――。

(完全に捕らわれの身……ってやつよね、マズ……)

二階層の趣味のよさから考えると、この部屋は魔女が自分のために用意したものではな
く、捕らえた敵を置いておくためのものだろう。そのあとのことは……考えたくもない。

気持ちは萎えそうになるが、なんとか暗くなるのをこらえていると、ギィィ……と鉄の

軋む音が部屋の端から聞こえた。外からの光で、入ってきた人物がはっきりと見える。長いブラウンの髪が揺れ、ドレスで隠しきれない豊満な肉感ボディが存在感を放っていた。

「イリーシャ……」

「あらあん、リヴィアちゃん。ようやくお目覚めなのね……心配したわよお？」

白々しい態度でそう口にする魔女。相変わらずの声色に、無性に苛立ちが込み上げる。

「よく言うわ……。あんたの心配は、自分の欲求を満たせないことだけでしょうが」

「言うわねえ、リヴィアちゃん。その状況でその態度、ますます素敵よ……うふふ」

口元を笑ませながらも、その目は鋭くリヴィアの肢体を射抜いている。これからこの獲物をどうしてやるのか、そんな魔女の心の声が聞こえるようだ。睨み返す目の前で、魔女はゆっくりと歩いてこちらに近づいてくる。

「……それで、あたしをどうしようっていうの？ 殺すなら、さっさと殺しなさいよ」

「あら、やあね。そんな野蛮なこと、するわけないでしょう？」

「だったらどうして……」

自分を捕まえているのか。そう問おうとしたときには、魔女の顔が目と鼻の先にあった。

「わたしはね、あなたが欲しいのよ、リヴィアちゃん。あなたみたいに可愛くって、腕の立つコが。だからね……わたしのものになりなさい？」

熱っぽく口説くようなそのささやき、もしリヴィアが男だったなら、その誘惑に耐えることなど不可能だったかもしれない。しかしリヴィアは女、しかもいたって健全で、ノー

マルな趣味の持ち主である。あつさりと誘惑をはねのけ、ジャラジャラと派手な鎖の音を鳴らしながら身を乗りだし、イリーシャに噛みついた。

「ふつどけるんじゃないわよ！ あたしの身も心も、全部あたしのモノよ。あんたなんか自由にしていいものじゃないわ！」

だが、そのセリフは予想していたのだろう。イリーシャは小さくため息をつくとき、冷ややかな視線、見る者を凍えさせるような酷薄な表情を浮かべた。

「ふふ、ならいいわ。たつぷりと躡けてあげる……そのためのリングと鎖なんだから。あなたのそのキレイな肉体、あますところなく快感で染め抜いて、あたしのため……いいえ、快楽を得るためならなんでもする、エッチなお人形にしてあげる。嬉しいでしょう？」

淫蕩に微笑んで、その口をいやらしく歪める魔女。リヴィアは全身に鳥肌が立った。

「じよっ、冗談じゃないわね！ それに、なにをどうされたって……そんなことになんてなるもんですか！」

「ふふ……いいわあ、その強気。そんなあなただからこそ、墮ちた瞬間が見てみたいの。楽しみだわ、ゾクゾクしちゃう……ああ、安心なさい？ あなたも楽しませてあげるから、たつぷり悶えていいのよ。もちろん……わたしも楽しませてもらうけどねえ？」

「別にあたしは、あんたを楽しませるつもりなんて……んぶっ——!？」

威嚇のために口を開いたリヴィアは、いきなり口を塞がれた。それも手ではない、魔女の妖艶な唇が、小さな花びらのようなリヴィアの唇に吸いついているのだ。

「んふふ……んじゅう、ちゅぶ、んんう、はあぶ……じゆるう……」

「んんう——つ、んぐつ、ぷう、ふむつ、んぶつ……んん」

突然のことに驚き、抵抗することも忘れてされるがままになってしまふ。イリーシヤは自身の口の中にリヴィアの唇をすっぽりと包み込み、肉厚な舌をくねらせてピチャピチャ卑猥な水音を鳴らしながら舐めしゃぶってくる。口の周りに唾液をすり込まれ、唇を吸い上げられ、濃厚なフェラチオを受けるように口が犯されている。ねっとり絡みつく口内粘膜が熱くてたまらない。わずかに開いた口の端から魔女の唾が流れ込むと、なぜだか異常なほどの甘さを感じさせられ、カアッと胸に熱がこもった。

「んふつ、んんんんつ、ぶあつ、はあ、はああ——」

ようやく我に返ったリヴィアは、自由のきく首を大きく振りたくって魔女の淫口から逃れる。大きく深呼吸をしていると、正面からくすくすと笑う声が聞こえた。

「ふふ……ごめんなさいねえ、がつついちやつたわ。リヴィアちゃんがあんまりにも可愛らしいものだから……もう、いけないコねえ」

「な……なにを勝手なこと言ってるのよ、このド変態！」

顔を真っ赤にして怒鳴るリヴィア、その心に渦巻くのは純粹な怒りだった。

（あたしの……ファーストキスが、こんな……女に、無理やり……くつ、最低……）

あまりのショックに涙が滲みそうになるが、魔女にそんなものを見せたくはなかった。だが、悔しそうに唇を噛むリヴィアを見て、なにか思い当たったように笑う。

「あら、もしかして初めてだった？ ごめんなさいねえ、好きなコに捧げられなくて」

「っ！ そんな奴、いないわよ！ ……けど、こんなの野良犬に噛まれたようなものね、気にもならないわ…淫乱魔女の口が触れたくらい、なんともないわよ！」

震えながらの強がり、に、魔女はますます嬉しそうに微笑んで唇をペロリと舐めた。

「ふふ、その調子よ。簡単には折れないで、もおつと生意気なところ、見せてちょうだい。ん…それにしても美味しいわねえ、リヴィアちゃんのお・く・ち♥ もう一度食べさせてねえ？ そうだわ…今度は、リヴィアちゃんからも吸ってもらおうかしら」

「だ、誰が…んぶうっ！」

リヴィアの意思など関係ない、という態度でもう一度、魔女が唇を奪う。そのとき、魔女の瞳が怪しく輝いたかと思うと、口の自由がきかなくなつた。

(なっ…こいつっ！)

魔女の魔力を流し込まれ、自由を奪われたのだと気づいたときにはもう遅かつた。勝手に開いた自身の口が魔女の舌を飲み込み、好物を食んだように涎を溢れさせ、ジュルジュルと音をもらしながら吸い上げる。口内に取り込んだ魔女の舌に、自らも舌を伸ばして絡ませ、唾液を泡立たせるほど激しくもつれ合わせてしまう。おぞましい事態と感触に、リヴィアの精神が悲鳴をあげた。

(き、気持ち悪い…放せ、放せえっ！)

だが、さきほどのように首を振ろうとすると、今度はそちらの自由も奪われた。傍目に



は、リヴィアがうつとりと目を細め、積極的に魔女の唇を吸い、舐め、舌を絡め、甘露を味わうように注がれる唾液をゴクリゴクリと飲み下しているようにしか見えない。ピクンピクンと震える手の平に魔女が自分の手を重ねると、指が勝手に動いて絡み、恋人に甘えるようにキュッと握らされてしまう。

「ちゅう……んじゆる、ちゆる、んぐ……ちゅばあ、ちゅ……」

『あらあら、そんなに気持ちよさそうにしちゃって。キスが好きなのねえ……んふふ』

魔女が思念を飛ばし、恥辱を煽る。なのに抵抗したくとも頭はピクリとも動かず、魔女の意のままに口を動かして情熱的な接吻を続けることしかできなかった。

(なんでっ!? おかしい……この感覚……身体が、勝手に……止まってよおっ!)

考えている間にも、次第に魔女が身体を密着させ、二人の間に隙間を作らないようにリヴィアを抱きすくめた。切なそうに絡む指をはがし、そのまましつとりとした手の平をすべらせ、全身を丹念に撫で回してくる。リヴィアの背中にゾワゾワと悪寒が走り、腰をくねらせて逃れようとするが、枷が邪魔をしてどうにもならない。全身の関節を固定されているリヴィアは、直立のままその屈辱に耐えるしかなかった。

「じゆる、ちゅううう……ちゅばあ……ふふ」

ボディタッチを続けながら、魔女が唇を離した。つう……と涎があごを伝う感触に、リヴィアはキスから解放されたことに気づいて目を開く。けれどいまだ自由を取り戻せていない口は言葉を発することができず、そのまま黙って魔女の行動を間近で見させられる。

(こ、今度は……あ、な……)

動けない目の前で魔女の舌が淫らにくねり、あごの先に触れた。そして――。

――ペロリ……。

(ひっ……)

やはり声はだせない。顔を舐め上げる舌の感触に、リヴィアは心の中で小さな悲鳴をもらした。それを感じたのかイリーシャはチラリと横目で確認し、目を微笑ませてそのまま舌を顔中に這わせる。ナメクジのような粘質を持って、唾液のあとをヌラヌラと残しながらリヴィアの顔全体が舌で蹂躪されてゆく。あまりのおぞましさにリヴィアはギュッと目を閉じ、脳に入り込む最悪の映像を追いだすことに躍起になった。けれど、視界を閉ざしたことで触覚が増してしまい、生温かい舌の感触がより深く心に刻み込まれてしまう。

(う……うう、離れろお……気持ち悪い……こんな、汚いの……最低よ……っ！ 触れるな……触れるな、触れるなあっ！)

リヴィアの願いも空しく、魔女による顔へのマーキングが続けられる。

柔らかな頬、形のよい鼻梁、長い睫毛の揺れるまぶた、きめ細かな肌には唾液で濡れていない箇所などなくなり、淫猥に光を反射していた。舐める場所がなくなると、舌は小さく丸まった耳にまで伸び、ピチャピチャと音を立てて愛撫してくる。それに合わせ、途切れることなく身体を撫でられ続けると、無意識に身体がピクンピクンと、感じているように跳ね上がってしまった。衣服の上からだというのに魔女の指技は巧みで、初心な少

女の官能を焦らすように刺激してくるのだ。

「んれろおお……んじゅ、ちゅうう……んふふ、ちゅっ」

顔全体を、舌が何往復も繰り返して、滴り落ちるくらいに唾液をまぶされたところで、ようやく顔が解放された。同時に口のコントロールも戻ったようで、堰を切ったようにリヴィアの口から激しい罵倒の言葉が飛び出す。

「こっつつの……変態！ あんたの舌なんて、世界中のどんなグロい蟲よりも汚らわしい、最低の塊よ！ そんなものを人にな……舐め……させて！ それに、顔中……汚すなんて……死なすわ！ あんたは絶対に死なす！」

じたばたもがくのに合わせ、鎖がジャラジャラと鳴った。そんなリヴィアの様子を眺め、イリーシャは嗜虐心を刺激されたように、ゾクゾクと背を震わせた。

「く……ふうう……ああ、いいわあ、リヴィアちゃん。だから、もつと絶望を与えてあげる……その強気な態度、いつまで続けてくれるのかしら……ふふ」

一瞬、なにかを思案する表情を浮かべたイリーシャはリヴィアの声を聞きながら、その身体をつなぎ止めていたリングを一つずつ外してゆく。叫んでいたリヴィアも思わず目を瞬かせて、戸惑いの声をあげる。

「な……なにをする気よ！」

「死なすんでしょ？ できるのなら、やってご覧なさいな……ほおら、自由になった。杖は返してあげられないけど、わたしの頬を打つくらいならできるんじゃない？」

「そうよ、上手いわねえ。んふふ、リヴィアちゃんのおしゃぶり顔、とおってもいやらしいわ。オチンチンが好きで好きでたまりません、って顔してるじゃないの」

もはやこの魔女にはなにを言ってもムダだ。そう考えてリヴィアは睨みもせず、この時間を早く終わらせようと一心不乱に口を動かした。

——ジュポオ……ジュプ、グプウウ……ヌポッ、グッポ……ズチュウ……。

「ふっ……んん……んうっ、んぐっ、んじゅう……」

溢れた涎が潤滑油になり、口内粘膜と触手の摩擦音がグチュグチュといやらしい水音を響かせる。混ざり合う唾液と汚液は触手の突き込みに合わせてさらに攪拌され、リヴィアの喉奥にトロトロと流れ落ちていった。最低の感触になにもかもを吐き戻してしまいたくなるが、それを上回る恐怖がリヴィアの心を縛りつけ、心にもない熱烈な奉仕を行わせる。耳に響くいやらしい音を自分でだしているなど、信じたくなかった。

（うあ、ううう……どうして、あたしが……こんなこと……）

口の中の触手は膨大で、舌を動かすだけでも一苦労だった。そのうえ、開きっぱなしのあごが疲れ、気を抜くと隙間ができてしまう。隙間からは唾液と汚液の混じった濁った粘液が垂れそうになり、リヴィアはそのたびに慌てて吸い上げ、ジュルジュルと啜るようになってしまった。屈辱的すぎる淫らな行為、なのに身体は快感を思いだして勝手に脱力してしまうのが、たまらなく惨めだった。その様子を魔女が満足そうに眺めている。

「ん……どうやらそろそろ、この口は限界みたいだわ。たあっぷりだされるでしょうから、

全部しつかりと飲み干すのよ。飲まなかったら……わかっているわよねえ？」

「んぐっ……ふむゆ、んちゆ……ちゆばあ、じゆるるるう……」

コクコクと微かな頷きを返し、舌先を先端の裏側、筋の走った箇所には伸ばし、つつきながらなぞり上げる。その動きに応えるように触手はビクビクと躍動し、敏感な口内粘膜を叩くように撫で返してきた。その仕草にリヴィアは、膣内や菊壺の肉襞を髪が這い撫でた感覚を思いだし、全身を震わせて悦楽を感じてしまう。恐怖と快感と苦しさ、それらの混じり合った未知の感覚にせつつかれ、リヴィアの口は勝手に一心不乱な口奉仕を繰り返す。平たく広げた舌を伸ばし、触手の根元から先端までをペロリと舐め上げ、混ざり合う淫液を馴染ませながら、ヌルヌルとした感触で優しい愛撫を施してゆく。

そして、リヴィアの快感に連動するように——触手が爆ぜた。

「んんっ……んぐっ、んぶうう——っ、ふぐうっ……」

——ドクドクドクッ！ ドプウッ、ピュルッ！

喉の奥深くに、熱い粘液を大量にぶちまけられ、リヴィアはくぐもった呻きをあげながらむせ返りそうになる。射精を終えた触手は霞のように消え失せ、跳ね返った大量の汚液が口内に満ち、濁液の濃密な粘り気が頬や歯茎からネットと糸を引いていた。獣の精を受けたときのような生臭さは感じない、けれど醜い触手はその身体から放出した汚液など、口に含まだけで嫌悪感が込み上げる。反射的に吐きだしそうになるのを懸命にこらえ、涙目になって魔女の顔を見上げた。

「うふふ……飲みなさい。美味しそうに喉を鳴らして、舌でピチャピチャと味わいながら、ゴクゴクって全部……ね」

(こっの……調子にのって……っ！)

かといって吐きだすわけにもいかず、しかし、魔女の言うように味わうつもりも毛頭なかった。息を止めて一気に喉の奥へ流し込もうとする。が――。

(え――)

それはお見通しだったのか、イリーシャが目を細めて魔力を流し込む。たちまち舌が勝手にくねり、口内の粘液をネットリと搦め捕った。そのまま唾液と混ぜ合わせながらグチュグチュと泡立て、攪拌し、舌の上で転がしてしまう。そればかりかあごまでが動かされ、歯が汚液のダマをすり潰すように咀嚼し、ついにはそれらで口内をゆすぐように口粘膜全体が塗りたくられてゆく。ジュール……という粘水音が、口内から脳へと響いていた。

(やめっ……やめなさいよっ、気持ち悪い……っ)

――グチュウ……チュル、ジュール……ヌチヨオ……。

あまりの事態に頭がパニック状態になるリヴィア。口内では舌が激しい動きで粘液同士を絡め合わせ、勢い余ったように口端からドロリ……とこぼれた濃い白濁液が、あごを濡れ光らせる。それを追うように舌が突きだされ、唇周りに付着した先走りのぬめりと合わせてチュルン……と舐め取り、また口内でニチャニチャと混ぜ合わせる。汚らしいなどというレベルではないほど最低の汚辱感に、リヴィアは心の底から湧き起こる嫌悪の震え

が押さええられなかった。だが……口の中はまったく違う反応を示してしまう。

「えぶああ……なん、れ……んじゅう……にやんでえ……」

唾液があとからあとから湧きだして、止まらなかった。感じる汚液の味はこれまで口にしたどんな甘露よりも甘く、舌にネットリと絡みついて味覚に刻み込まれてくる。

——グチュウ……又チュ、チュルル……。

泡だった濁液はより濃厚な味わいを感じさせ、リヴィアは思わず目を細めて舌の感覚に意識を集中させてしまう。感激しているかのように、まぶたから覗く睫毛がフルフルと揺れる。一舐めごとに甘い味と香りが脳に突き抜け、歓喜のあまり身体の芯が震えてしまった。

「んふふ……驚いたでしょう？ このコたちの体液はリヴィアちゃん専用だから、とおつても甘くなってるのよ。ほら、遠慮せず飲み込みなさい」

魔女から送られる魔力が断絶し、口の自由が返ってくる。だというのにリヴィアは、口内にたまった蜜液を味わわずにはいられなかった。心の声がさっさと飲み干してしまえと声高に叫んでいる、けれど一晩放っておかれた身体は飢え渴き、すべてを一気に喉の奥に流し込むのを拒否してしまう。舌の上でピチャピチャと転がしながら、白い粘液を数回に分けて少しずつ嚥下してゆくリヴィア。白い喉が動き、コクリコクリと小さな音を鳴らしては、その表情が淫蕩に染まっていった。

「んくっ……んぐ、こくう……ん……んふうう……はああ」

やがて、すべてを飲み干したリヴィアは熱のこもった吐息をもらした。——が、その次の瞬間、たったいま自分が晒してしまった醜態がフラッシュバックした。

「——っつ！ あ、あたし……いま、なにを……」

口に溢れる精液じみた白濁液を、痴女のように嬉々として舐め、飲み干し、あげく満足そうなため息までもらしたのだ。無意識に取ったその行動は、リヴィアの記憶に深く刻み込まれていた。信じがたい自分の行いに、顔を蒼白にして首を振りたくる。

「あ、ああ……ちが、違うっ！ いまのは……違うの！」

「なにが違うのお？ 目を潤ませて美味しそうに触手の体液を啜ってたの、忘れちゃったのかしら？ わたしはしっかり見てたわよ、リヴィアちゃんのエッチな顔を、ね」

魔女が赤い舌を伸ばし、リヴィアの口動を再現するようにクネクネと妖艶に踊らせる。

「うう、くっ……」

悔しげに顔を歪ませ、歯噛みする。罵倒の言葉も浮かばないほど、リヴィアは自分の取ってしまった行為に打ちのめされていた。

（けど……仕方ないじゃない、だって……）

お腹が空いていればどんなものでも美味しく感じさせられるものだし、空腹を満たさなければこの状況から脱する術も見つからない。ただの言い訳だとしても、いまはそう思い込むしかなかった。けれど魔女は、少女のそんなささやかな心の救済も認めさせない。

「ダメよお、リヴィアちゃん？ いくらお腹が空いてても、汚い体液を美味しそうにジュ

ルジュール啜り飲むなんて、はしたないんだからあ。んふふ……まあいいわ。ほら、まだおかわりはいっぱいあるわよ、好きなだけ飲みなさいな」

心にナイフが突き立てられるように傷を抉られ、責めが再開された。次の番を待っていた触手が、すぐさまリヴィアの口に飛び込んでくる。だが、リヴィアの心にはおぞましさや気色悪さではなく……さきほどの甘い味わいばかりが浮かび上がってしまった。

「んぐっ……ふむうう……ちゅぱあ……」

今度の触手もさつきのもの変わずたく、どこまでも深く侵入してくる。経験済みでもやはり慣れない感覚に耐え、リヴィアは必死で舌を使い、肉管を吸い上げた。

——グプウ……チュバ、ンジュウ……ジュールウ……。

口に硬いモノを含む、ただそれだけで条件反射のように甘い唾液が湧き、触手を吸い上げる音がジュールジュールという卑猥な水音へ変わってしまう。耳を塞ぎなくなる痴態の証明は、消え入りなくなるほど恥ずかしかった。魔女の嘲笑が耳元から脳へ流れ込む。

「そうよ、上手ねえ……さすが天才魔法士さん。覚えも早いし優秀だわ」

勝手な言い草に、魔女の戯れ言など気にしないでおこうと思っていたリヴィアの目も、自然とつり上がってゆく。

(許さないっ……この女！ くっ……もう、止めたい……のにい、どうしてよお……)

感情に反し、口の中の肉管に積極的な奉仕を行ってしまふ身が疎ましかった。一本目を相手にしたときに感じたポイントを自然と意識し、傘の周辺や裏スジ、蜜液の噴きだす小

さな穴に舌を擦りつけ、ご褒美をおねだりしているかのよう動いてしまう。ジュパジュパと派手な水音を響かせる激しい奉仕は口に隙間を生み、つう……と涎をあごに伝わせる。汚らわしいものを口に入れていのに唾液をこぼすなど、最低の気分だった。人として恥ずべき、自身の淫らな反応に心が引き裂かれそうになる。

「んぐ、じゅう……は、はひゃ……く、んぶつ、だすなら……だひなさい、あむう……」

それは、この状況を早く終わらせたいからなのか、それとも触手のだす体液の味に魅了されてしまったからなのか——。口はピツタリと触手を包み込み、強烈な吸い立てを硬くいきり勃つ触手に浴びせる。窄められた頬の内側からはグッポグッポとくぐもつた摩擦音が響き、唇からはジュルル……と唾液を啜る淫らな水音がこぼれていた。

（ふっ、んん……あ、くるっ、くるうっ！）

喉の奥で躍動を感じた。身体の内側を弄られる感覚がフィードバックし、子宮がキュンと震える。菊壺の壁がジクジクと疼き、奥のほうからジワリジワリと透明な腸液が溢れだした。太ももを伝う生温いぬめつた感触に顔が赤く染まるが、触手から蜜液がこぼれ、舌に触れるとそんなことは頭から消え失せ、ますます口技に力が入る。そして——。

「ふぐうっ……ふみゆっ、んむうう……んぐつんぐつ、んんうう——っ！」

——ドビユウウツッ！ ドプッドプッ、ビユクウツッ！

口内にドロドロのミルクが溢れ、さきほど以上の甘い味と香りが脳髓を直撃した。たちまち歡喜の涎が湧き、蜜液と混ざり合って、ドロリとした感触が食道を伝い落ちてゆく。

(はああ……気持ち悪い、のに……すごく、甘くって……)

蕩けきった表情で白濁した液を啜り、痴女さながらの姿を見せつけるリヴィア。思わず夢中になってしまふ心を、止めることができない。すべて飲み込んだ口内を見せつけるように唇が開くと、半透明な粘液が歯からネットリと糸を引いた。

イリーシャは満足そうにそれを間近で見つめながら、次の触手を少女の口元に突きつけた。リヴィアの琥珀色の瞳が淫蕩に潤み、その中にグロテスクな触手の姿を映し込む。

「——んあ、あむう……んちゅ」

舌先を伸ばし、桃花のような唇を開いて剛直を飲み込み、命じられもしないうちから奉仕を開始してしまう。すぐに垂れ落ちる先走りを掬い取り、喉奥に流し込みながら触手全体に丹念な愛撫を繰り返す。窄められた唇は、何本もの触手から浴びた汚液のぬめりで、テカテカと淫猥に濡れ光っていた。

——ンチュ、レロオ……チュル、チュパア……。

最初はむせ返っていた喉を貫かれる強烈な衝撃も、すでに気にならなかった。同じ状況で全身を開発されたせいなのか、身動き取れない身体を好き勝手に扱われると、全身を颯る髪の毛が甦り、自然と局部を疼かされてしまうのだ。長いストロークで口内を貫かれると、犯されているように錯覚してしまう。気がつくくと、浄化の光で汚れを取り除かれた床に、新たな恥ずかしい染みが広がりつつあった。

「あらあら、はしたないコねえ。フェラチオでこんなに濡らしちゃう女のこなんで、リヴ

「イアちゃんくらいのもよ？」

あごを掴まれ、頬の肉越しに触手を揉み込まれる。キッと強い視線で魔女を見上げるが口は開けず、唾液と混じり合った先走りの汚液が、チャポン……と口内で波打った。

「んぐっ……じゅばあ……このっ、ん……ろこまで、愚弄しゅればあ……んじゅう……」

口奉仕を続けさせられながら、リヴィアはなんとか抵抗の意思を見せつけようと途切れ途切りに言葉を吐きだす。しかし、その様子を見つめて魔女はますます嬉しそうに赤い瞳を細めて、いやらしく微笑む。

「ふふ……そんな美味しそうにおしゃぶりしながら、可愛い反抗するのねえ。これなら、もう一本啜えられるんじゃないかしら……ほおら、大好きなオチンチンよお？」

「んぶううっ！ ひゃ、ひゃめええ……んぐっ、じゅぶっ……ふぐうう……」

魔女の手が新たな触手を掴み、わずかな口の隙間を強引に押し開くように、血管の浮き出た太い先端を飲み込ませる。涙の粒が瞳の端に浮かぶが、一度口に入れられたものを吐きだすことは許されなかった。顔を真っ赤にしながらも、二本同時に奉仕をさせられる。

「んぐっ、じゅるう、じゅぶうう……う、ううう……はあむう、ちゅばあ……」

いつ終わるとも知れぬ口姦劇、リヴィアはイリーシャに命じられるまま、指示に従って舌を動かし、唇を動かし、触手に射精させてはそれを啜り取っていった。

◇

そして二十本ほどの体液を飲み込まされたころだろうか、リヴィアは胸に生じた熱い



疼きに違和感を覚え、視線だけを軽く下向かせてみた。と――。

「ウソ……なんで、こんな――」

そこにあつたのは、服の胸元をはだけて押し上げる肉の膨らみ。さつきまでのリヴィアには、悲しいことだがそれほどボリュームはなかったはず。なのに、突如成長したとしか思えない膨らみがそこにはあつた。そのときようやく、この胸の熱さが、さきほど魔女の手が触れたときに流し込まれた熱と同質のものだということを思いだす。半ば確信を込めて魔女に視線を移すと、疑惑を裏づけるようなイリーシャの笑みがそこにあつた。

「なにをしたのよっ……答えなさいっ！」

「うふふ、もう気づいてるんじゃない？ 触手の体液に反応して、胸が大きくなるように魔法をかけておいてあげたのよ。嬉しいでしょう、フェラが上達するのに合わせて、気にしてた貧乳が大きくなるのよ」

イリーシャの言葉に、頭を殴られたような衝撃が襲った。性感を開発されただけならまだしも、身体を作り替えられるなど……自然な成長と異なる変化は、もはや改造だ。

「も……戻しなさいよっ！ 早く！ あたしの身体……元に戻しなさいっ！」

「あら、気にいらなかった？ でも残念ねえ……薬の効果は永久、もう戻せないの……」

残念という口ぶりだと反対に魔女の唇はいやらしく歪み、淫らな肉体に変えられたリヴィアを嘲笑っているかのようにだった。その言葉が真実なのだと思いつき、全身が震える。

（そ、んな……あたしの、あたしの……身体、こんなこと……戻せ、ないの……）

(ちよっ……ウソでしょっ!? こんなときに……く……うう)

太ももがピクピクと小刻みに痙攣し、全身を包む寒気が肌を粟立てる。こらえようのない現象にすぐ反応を返したのは問題のその部分……膣口の少し上、尿道口がプルプルと震えだした。奥の膀胱が急に満たされたかのような突然の尿意に全身が強張り、口元をキュッと引き締めてこらえる。

『あら、どうしたのリヴィアちゃん? 顔色が悪いわよ……うふふ』

嘲笑を含んだ魔女の言葉にリヴィアが目が見開かれ、うつむいていた顔が上がる。

『こっの……性悪……っ! あ、あなたのしわざね……この、うう……んあっ……』

『ん〜? なんのことだかわからないけどお、もしかして、オシッコでもしたいのかしら? はしたないわよ、リヴィアちゃん。犬とはいえ女のコなのに、こんな街中で……』

あくまでとぼけたような声が頭に響き、少女の憤りを煽り立てる。だがここで無意味な否定をしても、待っているのは散歩途中で放尿してしまうという最低の惨事だ。それを避けるためにも、屈辱をグッと飲み込んで震える声で魔女に伝える。

『そっ……そうよ、だから……お願い! ト、トイレに……行かせて』

予期せぬ事態に戸惑う少女魔法士は、魔女に弱みを見せまいと思いつつも焦る気持ちを抑えられず、口早に乞うてしまう。魔女はいやらしく口元を歪ませたが、すぐにその邪悪な表情を引っ込め、にこやかな笑顔を向けた。

『そうね……もらされちゃっても困るし、行かせてあげるわ。幸いこの街には散歩中のペ

ツトのために公衆トイレが用意されてるのよ。もう少し我慢なさいね』

魔女の言葉に安堵するも、グイグイと鎖を引っばられてその顔がまたしても歪む。

「ま……待って！ ゆっくり、行つてよ……もれ、ちやう……」

『そんな悠長なこと言つてられないでしょ。ほら、歩きなさい！』

「ひんっ……くっ、ううう……覚えてなさいよ……」

駆け足でもないがゆっくりでもないという、いまのリヴィアを最も苦しめる速度で歩かれ、激しい振動が破裂寸前の膀胱を刺激する。微かに緩んだ尿道口から、チヨロ……と熱い雫が溢れそうになり、慌てて太ももに力を込めて股間を締めなおした。だが、排尿の欲求が緩和されたのも僅か一瞬のこと。すぐにまた尿道がプルプルと震えだし、膀胱の中で満タンまでたまっている尿が、たつぷんたつぷんと波打っているように感じる。魔女の速度に合わせて歩くと、引き締めた太ももがどんとどんと緩んでしまう。なのに、目的地はまだ到着しない。緊張の糸がいつ途切れるのか、気が気ではなかった。

（ん……くうっ、はあっ……ううん、ま、だ……？ も……限界、よお……）

気が遠くなりそうな我慢の時間に、頭がボオ……と霞んでしまう。もうなにもかも気にせず存分にオシッコしてしまいたい、そんな欲望を抑え込みながらヨタヨタと四つん這いを続けていると、ようやくその場所にたどり着いたのか、魔女の足が止まった。しかし、そこにあつたのは――。

「なっ！ なによ……これはっ……！」

思わず声を荒げるリヴィア。けれど魔女はこともなげに答える。

『なにつて、トイレよ。さ、たつぷりオシッコしちやいなさい、ジャージャーとはしたなく撒き散らしながらねえ』

リヴィアの目の前にあるのは牧場のような木の柵と板張りの床、そして立てかけられた木の板、それだけだった。広さはさほどでもなく、手を伸ばせば中の犬に触れられるくらい。周囲に遮る障害物などなく、外部からは丸見えである。すでに数匹の犬が中で用足しをしており、飼い主と思しき数名の男女は柵の外で、それが終わるのを待っていた。つまり、ここでリヴィアが放尿するということは……この見知らぬ街の人間に、自分のあられもない姿を見られてしまうということだ。考えた瞬間、リヴィアの怒りが大爆発した。

「い……いやよっつ！　こんなところで、できるわけないでしょっつ！」

『なに言ってるの、ワンちゃんはその板に足をかけて、オシッコするのよ。ほら、もらしたくないなら、さっさとなさい』

リヴィアの抗議も意に介さず、魔女は思念だけで少女の身体を意のままに操り、木張りの床に踏み込ませた。生乾きの湿った木の感触が手の平や膝から這い上がり、寒気がする。(くあつ……な、なにをさせんよ……やめ、なさい……つ)

動物たちの尿が染み込んだ床に肌をつけていると考えると、それだけで汚辱感が全身を包む。けれど身体は操られるままにペタペタと進み、板の前まで来ると高く足を掲げ、屈辱的な犬の放尿スタイルを取らされた。両手を床につけ、片足で身体を支えながら大きく

脚を広げて股間を周囲の人々に晒してしまおうという、考えられないほどの恥辱。全身が恥ずかしさと怒りに打ち震え、白い肌が真っ赤に染まっている。

(だ、ださない……っ！ 絶対……こんなところで、だすもんかあっっ！)

力の入らない無理な姿勢だというのに、人としての矜持を守る、その一心だけで限界を超えた我慢を自身の膀胱に強いる。極限まで高められた尿意、膨張しきった膀胱が悲鳴をあげ、少しでも尿道を緩めてほしいとリヴィアの心に訴えかける。この欲求をぶちまけることができれば、どれほど心地よいか、そんな誘惑の声が幻聴として響くほどだ。

(ダ、メ……こんなところで、絶対……)

あまりにも甘い、けれど危険な誘いを退け、リヴィアは鍛えぬいた精神力でさらに限界を超えようと括約筋に力を込める。……だが、それが大いなる災いを招いた。

「ひいんっ……あ……ああっ！」

キユウツと肛門を引き締めた拍子に敏感な肛門皺同士が触れ合い、ゾクゾクと背中に快感電流が流れてしまった。脚が痺れ、子宮が震え、全身の毛穴が開くような解放感が怒濤のごとく押し寄せる。張り詰めた糸を断ち、全身を弛緩させるには十分な刺激だった。

「やっ……ダ、ダメ……本当に！」

『なにがダメなのよ。さっさとだしちゃいなさい、変態牝犬ちゃん！』

——プシィッ……。

「あ……」

とうとう堰が切れた。きつく締めつけられた尿道口を押し開くように、黄金水の飛沫が飛び散る。膨らんだ尿口が持ち上がり、そこから一気に細い水流が噴きだした。

——ブシュッ、ブシュシュシュシュ——ッッ!

「ひいっ……いやあああ——っっ!」

自分が犬になっていることも忘れ、嫌悪の絶叫を張り上げてしまった。勢いよく射出される尿が、バタバタバタッと派手な音を響かせながら板を叩いて滴り落ちる。そしてその瞬間を、周囲の木の柵から取り囲む人々に見物されてしまった。

「はは、あの服着てる犬、スゴいな。だいぶ我慢してたみたいだぜ」

「もう、ジロジロ見るのやめなさいよ。でも……ぶぶ、たしかにそうね」

あちこちからそれと同種の揶揄するささやきが聞こえ、犬のように放尿する美少女は消え入りたくなるくらいに恥じ入る。真っ赤な顔からは湯気が立ち上りそうなほどだ。

(やめてっ、見るな……ああ、オシッコ……と、とまら、ない……止まんないっ!)

どれだけ願っても祈っても、たまりにたまっていた尿は途切れることなく噴出し続ける。隠したくてもまったく身体は動かさず、人々の視線が股間に集中するのが感じられた。犬に混じって野外で、しかも全裸同然の格好で股間を晒しながらの放尿。人としての尊厳を踏みにじるのに、これほど相応しい辱めもない。だというのに……リヴィアの身体は最低の反応を返してしまった。

突き刺さる視線に悦楽を覚え、もっとみっともない姿を見てほしいというように、肉花



弁をめくり返して肉壁の様子を剥きだしにする。力を込めていたはずの肛門はすっかり緩んでしまい、空気を取り入れるようにパクパクと蠢いていた。冷えた空気が腸内に侵入し、火照った腸壁をチクチクと刺激しながら、全体をゆっくりと撫で回してゆく。そのささやかな刺激が、リヴィアに絶望への一步を踏み込ませた。

(ひんっ……！　う、ウソ、でしょ……こんなところで、こんなことしてえ……)

腸内を撫で回す空気の感触が、狂おしいまでに快感を生みだす。腸で発生した疼きの波は子宮にまでその波紋を広げ、ズン、ズン……と身体の中心を突き上げるように、熱い昂ぶりを訴えてくる。一つ突き上げられるごとに、脳内ではパチパチと火花が飛び、理性の衣が一枚ずつ剥ぎ取られていくような気分だった。

(ダメ……ダメエエッ！　こんな、見られて……見られただけでえ……あ、ああ……？)

そのとき、気を逸らそうと遠くにやった視線が、こちらを見つめる一人の男の視線と交錯した。刹那、胸が大きくドクンと脈動する。

(あ……あたし、み……見られて……こんなはしたない格好で、オシッコしてるとこ……こんなことで……イ、イキそうな、とお……ひいんっ！)

思った途端、身体を支える脚がピクンとわなないた。

(ひゃんっ……イ、ク……ううん、イク、あたし、こんなので……イクウッ！)

ブルブルッと背中を駆け抜ける絶頂の予兆、それが頂点に達し——脳髓を弾けさせた。

「んああつ、はつつくうう——　つつ！　んはっ……くひゅうう……つつ」

こらえる隙もなく、リヴィアはヒクヒクツツと四肢を震わせて、思いきり背筋を仰げ反らせた。ピン……と張り詰めた背が、プルプルと小刻みな痙攣で快感を飲み込んでゆく。全身の血液が沸騰し、どれだけ高みへ上つてもその熱が引かない。子宮をキュンキュンとわななかせながら、リヴィアはさらなる絶頂へ飛翔させられた。みつともない絶頂顔を魔女の眼前に晒しながら、舌を巧みにくねらせて口内の触手をねちつこく愛撫していると、魔女がそつと耳元にささやきかける。

「まったく……そんなものをしゃぶりながらイッチャえるだなんて、リヴィアちゃんは真正銘、ド変態の淫乱牝ねえ……。いやらしいアへ顔晒して、恥ずかしくないの？」

羞恥を煽るその言葉、けれど主人からの罵りは奴隷少女にとって、とてつもなく甘い響きを秘めていた。脳が掻き混ぜられたようにクラクラと揺れ、魔女の豊満な胸にしなだれかかっってしまう。

「んぶあっ……やあ、い、言わないでください……はあむ……んじゅう……ちゅばあ」

恥ずかしがるのは口ぶりだけ、その吸いつきはますます激しくなり、口端から舌をはみださせてまで尻尾全体にテロテロと唾液をまぶす。さきほどまで魔女の首に回して抱きついていた手には別の触手が握られており、まわりつく粘液を絡めながら柔らかく抜き立てている。細長い少女の指は淫猥な娼婦がそうするように、人差し指で先の小さな穴をくすぐり、根元に詰まった白濁液を搾り取るうと、丸く広げた指の輪に胴体を通してギョツギョツとリズムよく締めつけを繰り返した。それだけでも、肌全体が敏感すぎるリヴィア

にとつては女壺を犯されるのと同等の快感を得ることができる。

(んふう……ひあ、あはあ……チンポ、チンポオ……)

身体中の穴を埋められて与えられる、細胞を蕩かささんばかりの愉悦に少女の胸がより熱く燃えたぎる。肉棒のことしか考えられず、自分の牝を何本もの牡槍が満たすことが誇りしかつた。もつと犯してほしい、辱めてほしい。被虐の欲求が全身を駆け巡る。

「んぶつ、んんつ、じゅぶうう……ちゆるっ……んっふうう……っ!」

——ドブツ、ドクドクウツ!

口内で触手尾がビクビクと弾けた。ジュワリと広がる甘い味に、リヴィアの目が喉を撫でられた猫のように細められる。

(あはあっ! でああ……んん、んふう……たまんない……)

口の中を汚液で濁らされているというのに、湧き上がる感情は喜悅のみ。チュルンと音を立てて二本の尾が口から抜き取られ、リヴィアは舌先で口いっぱい満ちる白濁汚液をチロチロと舐めた。牡の精臭に脳髓が痺れ、至高の味わいに舌がマヒしたように震える。ダメになった汚液の粒をプチプチと嘔みつぶし、口内粘膜すべてに練り込むように、まんべんなく舌で引き伸ばしてゆく。

(はあ、はああ……美味ひいい、飲みたいよお……でもお……)

グチュグチュと唾液と混じり合った粘液を泡立たせながら、リヴィアは物欲しそうな顔で主人を見つめた。腰を緩やかに突き上げながら、イリーシャはその顔をじっと見返し、

やがて意図を汲んだように少女の可憐な唇に指先を伸ばした。

「どうしたのお、リヴィアちゃん？ そんなにほつぺたをパンパンに膨らませて……女の
コがはしたないわよ。うふふ……なあに、このトロットロの粘っこのはあ？」

二本の指がリヴィアの唇にツルリと飲み込まれ、マドラーのように白濁液と唾液のカクテルを掻き混ぜる。隙間からこぼれそうになるのを必死で啜り上げ、リヴィアは指をしやぶりながら鼻息を鳴らす。

「んじゅ……んん、んふう……じゅるう……」

舌を摘まれ、表面に触れた指で甘露を塗りたくられると、すぐにでも飲み下してしまいたい衝動にかられた。しかしそれを懸命にこらえ、リヴィアは切なそうに瞳を潤ませる。魔女は淫猥に口元を笑ませ、指に力を込めて唇を割り広げた。

「まあ……いやらしい口マ○コねえ。注がれた触手ザーメンがタップ波打ってるわよ……ほら、突き上げられたらこぼれちゃいそう」

「んんうっ!? ああつ、おあああつ、あぶつ、ほわああ……」

イリーシャが強く腰を打ちつければ、キメラが肉棒を引き抜いてゆく。膣粘膜をこそぎ落としそうな甘刺激に、内臓を引き抜かれそうな感覚が重なり合って、リヴィアは頭を振り乱して悶えそうになってしまった。だが、チャプンと口の中で液だまりが波打つと、それをこぼさないように不安定ながら上半身を支えなおす。ブルブルといまにも崩れそうなほどに身を痙攣させ、リヴィアは魔女の許可をひたすら心待ちにしていた。



(はひやつ、はひやくう……飲ませて、飲ませてえっ！ イリーシャ様あ……)

許可なしでは精液を啜ることもできない。それでも不自由も不満もなく、主人にすべてを支配されている束縛感と、焦らしに焦らされてから望んだものを与えられる被虐的な充足感こそ、リヴィアにとって最高の褒美だった。

その褒美を待ち望んで、口を上向きに開かせて身悶える滑稽な美少女の姿に、背後の獣が愉快そうな笑いをもらす。

「グルッ、グルルルウ……」

「ほら、リヴィアちゃん。そんなみつともない姿してるから、キディちゃんにまで笑われちゃってるわよ。わたしの奴隷なんだから、もつとしっかりしなさいな……ふふ」

言葉でリヴィアの精神を責め立てながら、魔女の指がリヴィアの舌をグイッと上に引っぱる。さらに情けない表情になってしまったリヴィアは、目の端から涙をこぼしながら聞き取れない謝罪をか細くこぼす。

「おああ……お、おえん……ああい……」

言葉もままならぬリヴィアの様子に、魔女は心の底からはしゃぎ立てる。

「あはははっ、リヴィアちゃんつてば！ なに言ってるのかわかんないわよおっ！ まったく……そこまですてこんな汚い液体を飲みたいなんて、どこまで変態なのかしら！ いわ、存分に飲みなさい！」

魔女は指を引き抜くと、ポツカリ開かれた桃色の口腔目がけ、ドロリと唾液の塊を流し

込んだ。歡喜に瞳を輝かせ、それらが混ざり合うや否や、リヴィアは唇をキュッと引き締めて大きく喉を鳴らした。

——ゴク……ゴクウ……。

(はぁぁんう……イ、イリーシャ様の、唾液い……美味しい！ 触手ザーメンも、とおつても甘くって……あらし、しあわせ……)

夢中になつて唇を艶めかしく蠢かせるリヴィアは、まるで精液中毒のようだった。何度も何度も、ゴクリゴクリと美味しそうに喉を動かしながら、口いっぱいにたまっていた濃厚な白濁カクテルを胃の奥まで飲み下してゆく。

「んぐっ、んっく、ごくう……ごくっ、ごくっ……んっ、んぁ……れるう……んくっ」

ドロドロの液を飲み干すと、口内にへばりついた粘質の残滓を舌で集め、それもまた飲み込んでしまう。最後の一欠片を食道に落とした瞬間、熱い快感のマグマが子宮の奥から湧き起こった。そして——。

「イクのよ、牝犬奴隷！ 汚いザーメン飲んで、思いっきりイッちゃいなさい！」

イリーシャが立ち上がらんばかりに腰を激しく突きだし、子宮口をゴリッと抉つてその先端を子宮にめり込ませた。すべてを主人に捧げた悦びをこらえられず、リヴィアは喜びの呻きを迸らせる。

「んぎいっ、いいいいいいい——んんっっ！」

同時に菊壺の牡槍がその根元まで埋まるほど深く、直腸全体を埋め尽くす。腸壁と膈壁

を挟んで両肉棒が触れ合う感触に、狂いそうなくらい強烈な愉悅を送り込まれ、少女の官能は青天井で跳ね上がった。

「いびやあああつ、ひやめつ……イクのつ、リヴィア……イク、イクイクウウッ！ ああつ、ひはあああつ……イックウウウ——うつつ！」

快楽の奔流の前に、あっけなく理性の堰が瓦解した。はしたない大声での絶頂宣言とともに、リヴィアはバネでも仕込まれたように身体を前後に大きく揺さぶり跳ねさせ、美しい髪を振り乱しながら、脳内を白濁に染める快楽の爆発に飲み込まれた。

なにも考えられず、なにも視界に映らない。ただ身体に突き刺さる二本の極太肉棒の感触だけが明確にくつきりと感じられ、それだけで意識をどこまでも飛ばたかせてしまう。

「ひっ……ひあああ、あつはああ……」

ビクッビクッと小刻みな振動が身体を襲う。締めつけられる括約筋で硬い肉棒の感触をより強く味わっているのか、感極まった喘ぎ混じりのため息が細く長く、リヴィアの口からもれ聞こえた。扱っていた触手からも手を離し、全身を脱力させてイリーシャにもたれかかり、その首に抱きついてしまう。

「んっ……んんう、イリーシャ……さまあ……」

嫌悪と憎悪の対象であり、不倶戴天の相手とさえ認識していた妖艶なる魔女が、いまではリヴィアのすべてであった。身体の隅々にまで刻み込まれた淫楽の刻印が、リヴィアを魔女の手から逃れさせない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>